

# LabVIEW で DLL を作り、Visual Basic 6.0 で読み込む方法

このページで紹介しているリソースは ZIP 形式の圧縮ファイルとして添付されています。解凍ソフトを使って解凍してお使いください。

コンテンツ:

- [LabVIEW での DLL の作成方法](#)
- [DLL を Visual Basic 6.0 で利用する方法](#)

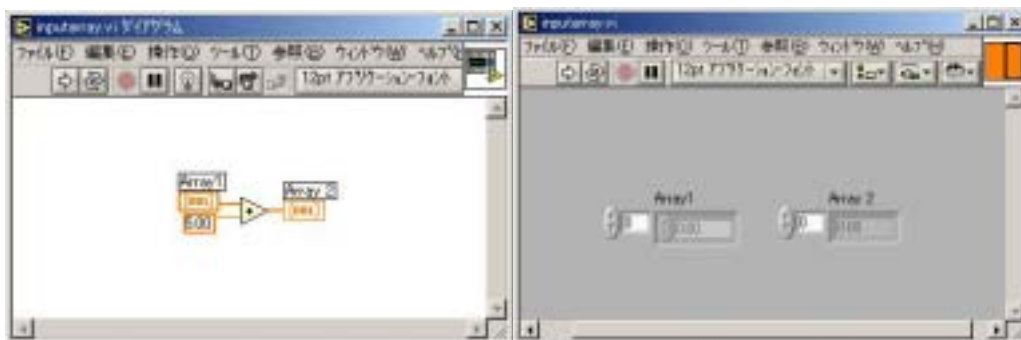
## LabVIEW での DLL の作成方法

LabVIEW で配列計算の DLL を作ります。

1. C:\arraydll フォルダを作成して、全てのファイルを置いておきます。

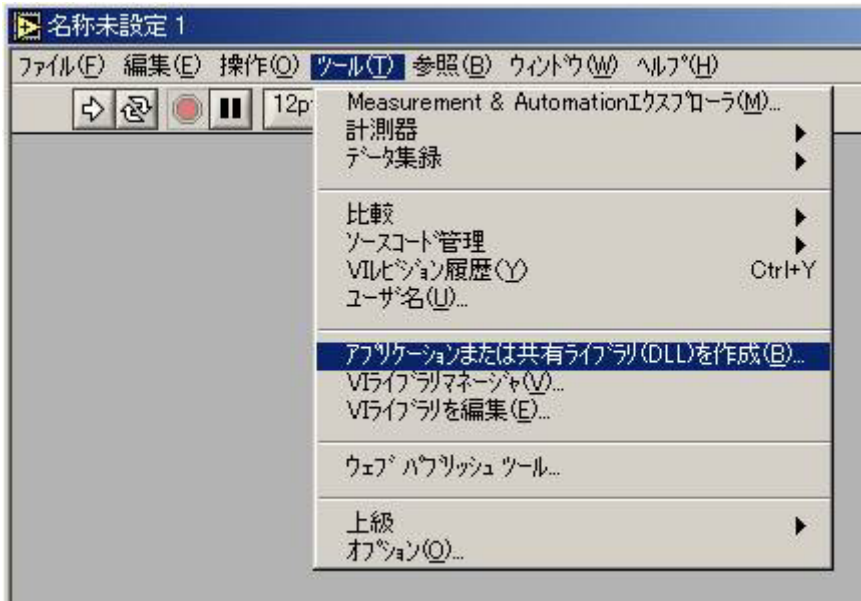
Inputarray.vi を LabVIEW で開きます。

ダイアグラムを確認すると、この VI は入力された配列に 5 を足す計算を行なうことが分かります。値が引き渡されるように、コネクタの割り当て (アイコン部分がオレンジ色になっている部分) も行なってあります。



Inputarray.vi を閉じて、新規 VI だけを開いた状態にします。

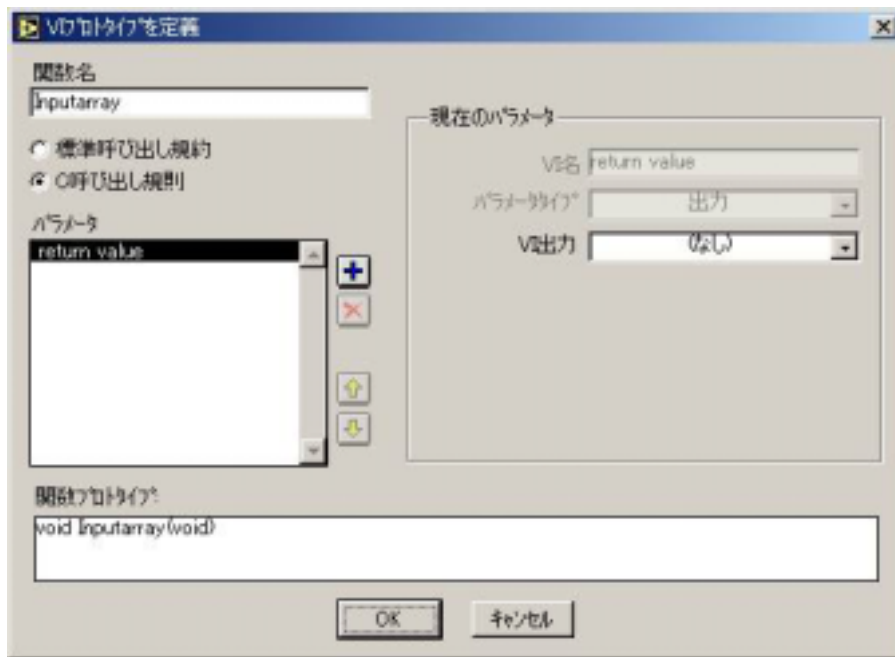
2. 下記の図のように「DLL 作成」を選択します。



3. 下記の図のように設定をします。



4. ソースファイルのタブを選択し、「Add Exported VI」をクリックして、Inputarray.vi を選択します。このとき、下記のようなウィンドウが開きます。

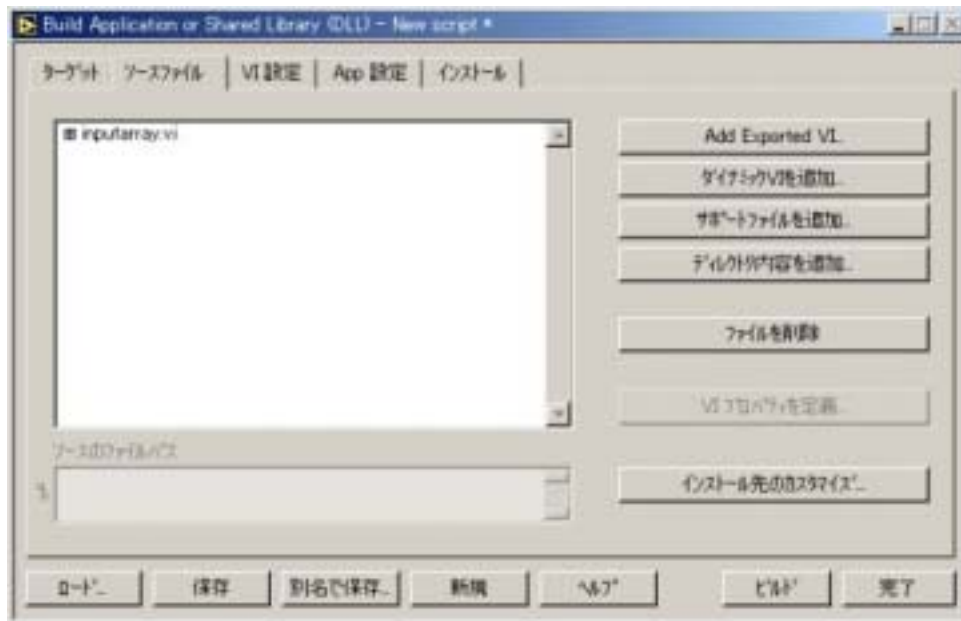


ここでは、「標準呼び出し規約」を選択します。

Inputarray.vi では、入力配列と出力配列の 2 つの入出力があるので、「+」を 2 回クリックすると、下記のようなウィンドウになります。



5. OK をクリックして下さい。下記のウィンドウに戻りますので、「ビルド」をクリックします。



ビルドが終了したら、完了を押して、LabVIEW を閉じます。

これで、C:\arraydll\SharedLib.dll が作成されました。

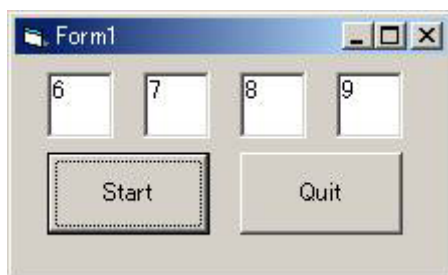
## DLL を Visual Basic 6.0 で利用する方法

DLL を Visual Basic 6.0 読み込みます。

1. C:\arraydll\Inarray.vbp を Visual Basic 6.0 で開きます。

フォームとして、Inarray.frm があるはずです。

Inarray.vbp を実行して、Start をクリックすると、下記のような結果が表示されます。



このプログラムでは、配列の初期値として、

$\text{inp}(0) = 1$

inp(1) = 2

inp(2) = 3

inp(3) = 4

を与えています。

2. この配列の値を LabVIEW の DLL に渡します。

LabVIEW の DLL では、各々の値に 5 を足します。

その戻り値を Visual Basic 6.0 側で読み出して、結果を表示しています。

したがって、実行後の結果は、

6

7

8

9

になります。

---

**Note:** Visual Basic 6.0 は、マイクロソフト社の商標であります。弊社では Visual Basic 6.0 に対するプログラミングの方法についてのサポートは一切行っておりません。